

「……珠」

広げられた書類を整理していた珠は、銀市に声をかけられて振り返る。

彼にじっと見つめられていたのは、己の手だった。

「指に血がにじんでいるな、あかぎれか」

そう指摘されて、珠は申し訳ない気分になりながら、そつと書類を置いた。

「すみません。よく拭き取ってはいるので、書類に血が移ってはいないと思うのですが」

「そうではなく、痛いだらう」

眉を寄せる銀市に、珠は戸惑った。

あかぎれやしもやけは、冬になるとどうしても避けられないものだ。なるべく冷たい水で仕事をして、終わった後はよくよく手の水分を拭うようにしている。だが、それでもなるときはなってしまう。

その指で水仕事をすれば確かに痛いのが、当たり前になっていて、今ではもうあまり気にしなくなっていた。以前の同僚達もそういうものだと言っていたため、銀市に取り上げられて困惑したのだ。

思案する風だった銀市は、珠に待っているように告げると退席する。

まもなく戻ってきた彼の手には、小さな容器が握られていた。

「膏薬だ。水仕事の後や寝る前に使いなさい。少なくとも痛みは引くはずだ」

「そ、そんな旦那様、大丈夫です。いつものことですから！」

差し出された木製の小さな容器を前に、珠は狼狽えた。薬はけて安くないものだ。

けれど銀市も引きはしない。むしろ眉を上げて、とがめるような色を帯びた。

「……珠？ 旦那様は、やめる約束では？」

「あっ」

うっかりと慣れたほうで呼んでしまった珠がひるんでいるうちに、銀市に手を取られて容器が手に落とされてしまう。その拍子に銀市の白く滑らかな手が目に入り、あかぎれとしもやけで荒れた自分の手がよく目立った。

「治るまでは、水仕事を減らすと良い。家鳴りはあかぎれにはならないからな」

「ですが……」

「適材適所というやつだ。これでは悪化するばかりだろう。治った後に戻ればいい。良いな？」

「かしこ、まりました」

有無を言わさない銀市に、珠はおずおず頷く。

すると、銀市は顔を安堵に緩ませた。

「いつもありがとう。河童の膏薬はよく効くぞ」

詳しい使い方まで教えて貰った珠は、その夜、恐る恐る容器の蓋を開いた。

面倒であれば自分が手当をする、という銀市の申し出を断ったのだ。使わない選択肢はなかった。

薬は草色をしていて、指ですくい上げてみると、つん、とした独特の薬の匂いがする。けれど、嫌になるほどではない。

塗った瞬間は少しだけ沁みたが、それもすぐになじんでゆく。手当を終えた珠は、膏薬の草色に染まった手をそつとなぞる。銀市の穏やかな顔がふっと浮かんだ。

労って、くれたのだ。胸の奥がほころぶような、そんな不思議な感覚に包まれる。

膏薬を塗った手に、銀市の手が重なった時のぬくもりが残っているような気がして。

その日、珠は両手を握るようにして眠った。

翌朝、朝食の準備をしている頃にやってきた銀市に、珠は挨拶もそこそこ、明るい気持ちで声をかけた。

「あの薬を塗ったら、指がまったく痛くなくなったんです。水も沁みなくて驚きました」

銀市からあらかじめ言われていたのか、家鳴り達は率先して水仕事を引き受けてくれてしまった。そのため、本格的な水仕事はしていないものの、それでも水を使っても沁みないのは珠にとって感動することだった。

ほのかに表情すら明るい珠に、銀市は目を細めて頷く。

「それはよかった。傷がふさがった後も使うと良い。予防もできるらしいから。使い切ったら言ってくれ」

「でも、あの」

「駄賃代わりにおいて行かれるんだが、持ち腐れていたんだ。瑠璃子にはおいが嫌だと使わなくてな。ああただ、かかとも使うと良いとは言っていた」

確かに、いつも良い香りをまとっている瑠璃子が、あの独特の臭いのする薬を使う姿は想像できない。

納得した珠は、痛くない指をそつと握る。いつもは冷たいはずの指先が温かくて、胸の奥まで温かい気がした。

珠には返せるものが何もなくて、まだこの銀古にも満足に貢献できているとは思えない。なのに銀市はこうして珠を気遣ってくれるのだ。

だから、せめて彼に願われた事はしっかり守ろう。

珠は、心の中で間違えないように繰り返してから、銀市に対し口を開いた。

「銀市さん、ありがとうございました」

「どういたしまして、だな」

銀市はゆったりと口角を上げた。なんだか嬉しそうなのは、珠の気のせいではないのだろう。不思議に思っていると、銀市が少し照れくさそうにする。

「いや、なに。やはり名で呼ばれるのは良いものでな。頑張ってくれる君がありがたいと、思ったところだ」

あ、と珠は思い出した。「珠貴」と呼んでもらえた時に感じた昂揚を。

同じに語るのは恐れ多いが、つまりは銀市もそのような気持ちになるのだ。

名前と呼ばれて、嬉しい。たったそれだけのこと。

あそこでは是と頷いた珠だったが、今まで恐れ多いとしか思っていなかった。けれど、銀市が嬉しいと感じてくれるのであれば、珠だって嫌ではないのだ。

そのまま、食事を始める銀市の横顔を密かに見つめ。

珠はきちんと呼べるように努力することを、一層心に誓ったのだ。